視覚表現に描かれた涙の造形的要素とジェンダー

矢島毅昌（立教大学大学院）

1. はじめに 一涙とジェンダーの研究一

生理現象の一つである涙は、我々の社会では単なる生理現象にとどまらず、文化的・社会的な意味や役割を持っており、生理学／生化学／哲学／心理学／社会学／人類学等の幅広い領域で研究の対象とされている。もちろん涙は研究の世界のみならず、小説や演劇等の文芸や娯楽の世界でも幾度も描かれてきており、多くの人々を魅了し続けてきた。

日常生活において涙は、特に感情や性別に関係した意味付けがなされることが多く、教育や社会を考えるためには重要な分析対象となる。ジェンダーについて考察するうえで涙が重要な着眼点になることは、ポーヴォワール (Beauvoir) の『第二の性』からも伺える。同書において、男性の場合は、子どもの頃から泣かないものとされて涙を我慢することを学ぶ一方で、女性の場合は、思春期を迎えると不安や苛立ちや怒りの爆発が涙となって現れ、その後も多く女性は涙を流すことを趣味として持ち続けると指摘されている (Beauvoir 訳書 2001, 16-17 頁; 33 頁; 65 頁)。

涙の研究において、フレイ II (Frey II) やルッツ (Lutz) は、男女間では涙の流し方や受けとめられ方が異なっていることや、それらの違いは地域や時代により異なっていることを明らかにした (Frey II 訳書 1990, Lutz 訳書 2003)。これらの調査データを集めれば、様々な男女間の涙の違いが示される。だが、涙に男女間の違いがあると論じる研究は、男女の違いが「ある」こと自体について問うものではなく、「男性と女性との間に違いがある」という規範的な物言いを、涙を通じて再確認するのみである。

本報告は、涙の分析を通じて、「男性と女性との間に違いがある」という議論が見過ごしてきた、「違い」の中に見え隠れする不均衡なジェンダーの関係や、「違い」をつくるメカニズムを明らかにすることを目指すものである。

2. 視覚表現に描かれた涙

涙を流すことは、言語の獲得や年齢によって

頻度に差があるものの、誰もが生活の中で経験することである。子どもが泣くことについては参与観察等による研究の蓄積が進んでいるが、その他については詩や小説、ドラマや映画で描かれた泣く場面も研究の対象となるだろう。涙が「光る」「あふれる」等の形容をされることを考えるならば、涙は造形的要素の強いものであり、視覚表現を研究対象とする必要がある。

視覚表現に描かれた涙の分析は、それが「感動の物語」や「泣ける物語」であると明らかにすることが主流である。映画やマンガ等の研究では、涙を流すに至るまでの物語を分析し、その内容がいかにか登場人物もしくは読み手の感情へ強く訴えかけるものかが論じられてきた。絵画の研究は一見すると造形的要素からの分析が中心となりそうであるが、図像学的方法のような、絵画の表層の下に隠された意味や物語を明らかにするものも多い。しかし、視覚表現における涙は、その造形的要素も重要であり、涙を流すにいたるまでの物語内容を分析するだけでは不十分である。

また、ジェンダーの観点からメディアを分析する場合は二つの方法がある。一つはメディア内容のジェンダーバイアスを浮き彫りにするもので、登場する男女の量的不均衡、年齢や職業等の属性の偏りの違い、固定的な性役割や「らしさ」の浸透等を明らかにする。もう一つは、男性向け・女性向けにはっきりと分かれている性別のジャンルの内容と受け手の反応を分析するものである (木村 2003, 44-45 頁)。これらの方法によって、視覚表現をジェンダーの観点から分析する優れた研究が展開されてきたものの、必ずしもその造形的要素を重視した研究ではなかった。

涙には男女間の違いがあるとする考え方は根強い。そうであれば、視覚表現に描かれた涙は、「違い」の中に見え隠れする不均衡なジェンダーの関係や、男女間の「違い」をつくるメカニズムをも描いているのではないだろうか。もっとも、涙が視覚表現において重要な意味を持ち、効果的に使用されるものとしても、基本的には涙それ自体がジェンダーを表現するわけ

ではない。しかし、涙に男女間の違いがあると
する考え方の背景には、涙とジェンダーとを密
接に結びつけた視覚表現が存在するのではない
か。つまり、涙はジェンダーをとりまく諸問題
を可視化する造形的要素として捉えることも可
能であると考えられる。

3. 絵本に描かれた涙の造形的要素

本報告では、造形的要素と物語的要素とが複
雑に絡み合った視覚表現に焦点を当てるため、
涙を描いた絵本を分析の対象とする。

従来の絵本は、一定に評価の定まった童話や
昔噺等に絵をつけたものが多く、そのために教
訓的な内容やしつけのための内容をもったもの、
文字や言葉や知識をおぼえさせるためのものが
大部分をしめていた。現在では絵本の芸術的側
面が一部で強く意識されるようになってい
るが、多くの絵本論では、児童文学の流れで押さ
えられるところはしっかり歴史化され書かれてい
る一方で、デザインやアートの流れの部分
が所々で抜け落ちている。またデザインやア
ートの要素が強い絵本は、絵画的なわかりやす
さやストーリー性が乏しいものと見做され、
批判の対象となることもある(松本 1982, 中
川・今井・笹本 2001)。絵本の研究は、
教育的・教訓的な内容を持った物語的要素
に偏って分析されているのが現状であるとい
えよう。

絵画と比べて教育や教訓を含む物語的要素
がより前面に出ている絵本を分析する際
には、「視覚体験を大きく犠牲にしてきた」
(Alpers 訳書 1993, 16 頁) 図像学的な
分析以上に、視覚体験が犠牲にされてきた
ことが想像できよう。

このような問題を踏まえて、絵本に描かれた
涙を以下の造形的要素を中心に考察する。

(1) 涙にいたる絵本画面の構成

絵本はページをめくることによって次々とシ
ーンが展開される。それは、単に物語を時間
的に進行させるだけのものではない。画面の
連続性にリズムや流れを生じさせることによ
って、どこで何を強調して描き込むのかを
コントロールする。ページをめくっていき
につれて、描く対象の大きさ／数の多さ／
描き込みの細かさ／色の濃さ等の要素に
強弱差が表現されることによって、強調さ
れるべき主題が決定されることになる。

(2) 涙の雫の形・色・肌理

涙を絵にする最も一般的な方法は、涙の雫
を描いて面を形成することである。そして
面の塗りによって、涙の絵のフォルムの性
格が決まる。実際の涙の色は無色透明であ
るが、絵で涙を描く場合は無色透明であ
るとは限らない。主に使用される色は、
白や水色である。白で描かれた涙は、紙
の地の色と同じである場合も多く、絵の
余白部分に溶け込むこともあり、色の選
択によって画面中での涙の性格が異な
ってくる。さらに輪郭線の無い単一色で
塗られた涙は、線によって描かれた涙
と比べて、面としてはアクティヴなもの
となる(Klee 訳書 1973, 168-172 頁)
ため、また画面中での性格が異な
ってくる。

涙が強調された画面の特徴を、ジェン
ダーに着目して分析することによって、
涙とジェンダーとの関係を従来の研究
とは異なる視点で考察できる。涙の
造形的要素を分析することを通じて、
ジェンダーを可視化していく視覚表
現の技法を研究するための端緒とし
たい。

(具体的な事例の分析は、当日に報告予定。)

引用文献

- Alpers, Svetlana 1983, *The Art of Describing : Dutch Art in the Seventeenth Century*, University of Chicago Press, (=1993, 幸福輝訳『描写の芸術—17世紀のオランダ絵画』ありな書房) .
- Beauvoir, Simone de 1949, *Le Deuxième Sexe II L'expérience vécue*, Gallimard, (=2001, 『第二の性』を原文で読み直す会訳『決定版 第二の性 一体験 [上]—』新潮文庫) .
- Frey II, William H. and Langseth, Muriel 1985, *Crying : the mystery of tears*, Winston Press, (=1990, 石井清子訳『涙—人はなぜ泣くのか』日本教文社) .
- 木村涼子 2003, 「女性キャラはなぜ一人?—アニメやマンガにおけるジェンダー」天野正子・木村涼子編『ジェンダーで学ぶ教育』世界思想社, 42-59 頁。
- Klee, Paul 1956, *Das bildnerische Denken*, Benno Schwabe & Co, (=1973, 土方定一・菊盛英夫・坂崎乙郎訳『造形思考 [上]』新潮社) .
- Lutz, Tom 1999, *Crying : The Natural and Cultural History of Tears*, W. W. Norton & Company, (=2003, 別宮貞徳・藤田美砂子・栗山節子訳『人はなぜ泣き、なぜ泣きやむのか? 涙の百科全書』八坂書房) .
- 松本猛 1982 『絵本論—新しい芸術表現の可能性を求めて』岩崎書店。
- 中川素子・今井良朗・笹本純 2001 『絵本の視覚表現—そのひろがりとはたらき』日本エディタースクール出版部。